

(社) 東洋音楽学会関西支部

支部だより

第17号 (1993-10-25)

Newsletter of the Kansai Chapter, Society for Research in Asiatic Music

## 定例研究会のご案内

(社) 東洋音楽学会関西支部

第166回定例研究会

日時 1993年11月13日(土) 14:00-16:30

会場 大阪大学 文法経講義棟 13教室 (視聴覚教室)  
豊中市待兼山町1-1

会場へのアクセス

阪急宝塚線「石橋」下車徒歩15分 / 「蛍ヶ池」下車タクシー5分

【連続講座】

〈音の今昔〉

「テンブラウタの素材をめぐって

— ミクロネシア・ヤップ島における日本音楽文化受容へのアプローチ —

小西 潤子

【話題提供】

「沖縄音楽について言いたいこと一つ二つ」

長方 正博

司会：高岡結貴 会場：田井竜一

## 第165回定例研究会の記録

日時 1993年9月18日(土) 14:00-16:20

会場 大阪音楽大学K号館403教室

研究発表

「ペルシアのサントゥール — 構造、奏法、音楽的解釈」 斎藤 浩

連続講座 音の今昔

「20世紀初頭の録音が現代に訴えるもの」 山口 修

司会：山田 智恵子

#### 第1.6.4 固定例研究会研究発表要旨

長唄において三味線の旋律はどのように弾き分けられているか？

矢向 正人

三味線音楽では、スクイ、ハジキ等の特殊奏法、また、通常は三の糸で弾かれる音を二の糸で弾く、二の糸で弾かれる音を一の糸で弾くなど糸の代用がよく行われる。本研究では、長唄十曲を例に取り小十郎譜に現われた特殊奏法と糸の代用箇所の実分析を行なった。

「娘道成寺」「吉原雀」「老松」「宵はまち」「小鍛冶」「時致」「鶴亀」「末広狩」「都鳥」「花見踊」の三味線の旋律をコンピュータに入力し、特殊奏法が記譜されている箇所の分布を調べた。

- ①スクイは開放弦の音に現われやすい。ハジキは開放弦の音の他、三の糸の音に現われやすい。
- ②スクイ、ハジキがパターンを作っている例がある。
- ③スクイ、ハジキはクドキがかった緩やかなテンポの箇所よりもチラシがかった速いテンポの箇所での出現頻度が増える。
- ④スクイ、ハジキは緩やかなテンポの箇所では、休拍や間延びした箇所に挿入されることにより旋律に切れ目を作らないための手法として、速いテンポの箇所では、音色を積極的に差異づけるための手法として用いられる。
- ⑤スリ、ウツは2度上行する動きに伴って現われた後、再び下行する例が多い。
- ⑥スクイ+ウツ、ハジキ+スリなど異なる特殊奏法が複合的に用いられている例も多い。
- ⑦糸の代用の指示は、開放弦の音程の幅(4度、5度)の上下行の旋律進行に沿って付されている例が多く、弾きやすさ、手の動きの合理性を考慮して付されている。
- ⑧糸の代用の指示は、一方、一の糸の開放弦の音と接近して現われやすい。一の糸の開放弦の音は、サワリの響きを多く含み、三味線の音のなかで独自の音色を持つことが確かめられている。このことから、糸の代用は音色を積極的に差異づけるための手法としても用いられていることがわかる。

以上の結論を得た。

#### 第1.6.5 固定例研究会研究発表要旨

ペルシアのサントウル — 構造、奏法、音楽的解釈

斎藤 浩

サントウル santur はペルシア(現在のイラン)の音楽には欠くことのできない楽器である。台形の箱に72本の金属弦を張り、メズラブ mezbab と呼ばれるバチで打弦して演奏する。この楽器はシルクロードを渡りインド、中国、モンゴルへ、またヨーロッパにも伝わり、ハンマーダルシマーやツインパロンといった大型の楽器に改良されていった。

サントウルはアーヴァーズ avaz と呼ばれる歌の伴奏楽器としてだけではなく、旋律楽器、独奏楽器としても好んで用いられている。今回、対象とするのはサントウルで独奏されるチャハールメズラブ chahar mezbab である。チャハールメズラブは「4つバチ」を意味し、非常に速いテンポで演奏され、軽妙でリズムカルなバチさばきが要求される部分である。1930年代以降、古典音楽に五線記譜法が導入されてからは、本来、即興演奏といわれているチャハールメズラブも五線譜化されるようになった。そこで、イランのサントウル奏者であるファラマルーズ パイヴァー Faramaruz Payvar のチャハールメズラブ作品集をもとに旋律・リズムパターンを見だし、即興性を探ることにした。また、奏者の視点でチャハールメズラブをとらえることができるようにタブラチュア譜を考案し、そこに音を移し替え分析を進めた。

その結果、いくつかのパターンやチャハールメズラブの構成要素を導き出すことができた。さらに、アボル ハサン サバー Abol Hasan Saba のチャハールメズラブも分析し、ここでもパイヴァーのものと同じような特徴があることを確認した。チャハールメズラブは、これらのパターンの組合せによって展開され、これをもとに即興演奏も可能となっているのではないかと思われるのである。

テンブラウタの素材をめぐって

— ミクロネシア・ヤップ島における日本音楽文化受容へのアプローチ —

小西 潤子

ミクロネシア地域は、19世紀末頃からのスペイン、ドイツに続き、両大戦に挟まれた1914年から1945年までは日本の植民地支配をうけた。その間、ヤップの場合、西洋列強諸国による影響はさほどでもなかったのに対して、日本からの影響は多大なものであった。音楽文化に関しては、日本のスタイルが消化・吸収され「テンブラウタ」「テンブラオドリ」と呼ばれる新しいスタイルのものが生み出されたことに最も顕著に現れている。「テンブラウタ」という名称は、料理の「天婦羅」と「歌」を意味する日本語を借用したもので、天婦羅の衣をつくるときに卵や小麦粉、水を混ぜ合わせるように、歌詞にヤップ語と日本語を折り混ぜることに由来する。

当時、ヤップにもたらされた「日本の音楽」とは主に明治から太平洋戦争前までの唱歌、軍歌、歌謡曲など広義での流行歌であった。歴史的にみた場合、1914年からは唱歌・軍歌が、1930年代からは歌謡曲が受容の中心であった。一方、日本国内では、復活唱歌（カチューシャの唄）（1914年、中山晋平作曲）のヒット以来、マスコミを媒介とした歌謡曲の興隆期であり、1930年代後半には中山や古賀政男が戦前の歌謡曲黄金時代を築いていた。彼らの最新のヒット曲はレコードを通じてヤップの人々にも日本国内とリアルタイムで知れ渡り愛唱されていたのであり、彼らの音楽様式のうちとりわけ拍節感や旋律構造面での特徴が後々のテンブラウタにまで大きな影響を及ぼすことになった。その理由の1つとして、そうした特徴が古来からヤップに存在していた恋愛歌メレン melengにも共通して見られることに注目し、テンブラウタの歴史的展開について考察したい。

沖縄音楽について言いたいこと一つ二つ

長方 正博

風狂の歌人、沖縄民謡界の大御所である嘉手苅林昌が、ある日舞台に登場するや否や聴衆に向かって「ウタ チチガチュール フリムンヌ ウグトウヤー（歌を聞きに来るようなバカがいるんだなあ）」と言ったという有名なエピソードがある。その発言の真意は、「歌は歌うものなのだから、ただ聞くだけというバカなことはせず、皆も歌ってくれ」ということらしいのだが、そうした嘉手苅流の思考形式からすれば、沖縄音楽などを研究している我々などはバカの二乗、あるいは超限数のバカということになるのかもしれない。しかし、バカはバカなりに一生懸命にやってきたのである。

沖縄音楽を「日本音楽」という文脈で語ろうとするバカがいるし、幻の琉球音階を追い求めるバカがいる。また、途方もない仮説の下に、沖縄音楽を中心として世界の音楽を説明しようとする壮大な学説を展開したバカもいた。様々なバカたちが真面目に沖縄音楽に取り組んできたのだ。だが、それぞれが勝手に言いたいことを言っているだけで、沖縄音楽という対象の認識そのものが共通していないようにも思える。そうしたところがバカのバカたる所以なのかもしれないが、そのままでは何の進歩もない。立ち止まって考えるバカよりも、あちらこちらと歩を進めるバカの方が少しはましではないだろうか。

我々は動き回らなければならない。しかし、ただ闇雲にというのも芸がないし、いかにもバカみたいだ。だから、まずは現状の反省ということから始めるのが良いだろう。牛でも、一度飲み込んだものをもう一度噛み砕くぐらいのことはするのだから、バカにだって自分の考えを考え直すことができるはずだ。それから四方八方に踏み出せば良い。そうすれば、森高千里の歌やザ・ブームの「島唄」なども沖縄音楽の文脈の中で語るることができるかもしれないし、また、そういう考え方が音楽研究のバカには必要なのではないだろうか。

▽編集後記

前回（第165回）の定例研究会のご案内は葉書連絡でしたので、1ページにその内容を再び掲載しました。

▽例会理事より

1993年度東洋音楽学会全国大会は、来る12月3日（金）－5日（日）沖縄県立芸術大学を主会場として、開催されます。

次回（第166回）の定例研究会では、これにちなんで、長方正博氏に、沖縄音楽に関する話題提供をお願いしました。

▽今後の定例研究会開催予定（会場は未定）

第167回	1994年2月
第168回	1994年4月
第169回	1994年6月
第170回	1994年9月
第171回	1994年11月
第172回	1995年2月

定例研究会での発表等を常時募集しています。下記の方法によりご応募ください。

\*申込方法

連続講座、発表の種別（研究発表・調査報告・資料紹介・研究演奏など）、発表題目、使用希望機器、希望日、所属、氏名、連絡先を明記の上、下記宛て送付ください。なお、申込多数の場合など、必ずしもご希望に添えないこともありますので、あらかじめご了承ください。

定例研究会のお問い合わせ

〒673-14 兵庫県加東郡社町下久米942-1 兵庫教育大学 水野信男  
Tel. 0795-44-1101内線521  
Fax. 0795-44-0669（水野宛と明記）  
〒860 熊本市黒髪2-40-1 熊本大学文学部地域科学科 櫻井哲男  
Tel. 096-344-2111内線2469  
Fax. 096-366-6957（宿舍）

住所変更等連絡先

〒560 豊中市待兼山町1-1 大阪大学文学部美学科 山口研究室気付  
（社）東洋音楽学会関西支部 \*葉書にてご連絡をお願いいたします。

発行：（社）東洋音楽学会関西支部

〒560 豊中市待兼山町1-1 大阪大学文学部美学科 山口研究室気付